

癒しの女性史ゼミ (1998. 11)

ジーン・アクターパーク (長井英子訳) 春秋社 (1994)

『癒しの女性史—医療における女性の復権—』

報告: 藤野彰子

このゼミは、院生の一人一人が気楽に議論に加わり活発に自分の考えを言えるような場としてにと企画された。一回に 150 ページ程度の内容の中から、リポーターが論点を提示する方式で進められ、2 回で終了した。

この本は、西洋の癒し(ヒーリング)の伝統における女性の役割と、失われてしまった医療における女性の地位の復権をはかろうとしたものである。

メソポタミアのシュメール人は高い癒しの技術を持ち、女性も比較的自由にヒーラーとして医療にかかわっていた。しかし女性はラテン語を学ぶことが許されなかったために、自分たちの活動を文章に残すことができなかった。そのために彼女たちの活躍は歴史の中から消されてしまった。

西洋医学の父祖とされるヒポクラテス、アリストテレスの時代においても、女性たちは、実際には西洋医学の基礎づくりに貢献しているのである。例えばアリストテレスの妻は、夫とともに働き共同で業績を作り上げた。ヒポクラテス、アリストテレス等の個人の業績とされるものは、この時代の多くの人物の著作の集大成であり、女性たちの著作も多く含まれていた。ローマ時代には、女性の力はある程度権限や自由を享受することができた。

初期のキリスト教においては、女性ヒーラーが、病人の介護、治療に貢献した。中世になるとキリスト教の教義では、女が原罪をもたらしたとして、女性ヒーラーの癒しの技はおしこめられてしまった。

女性ヒーラーには、尊敬に値する豊かな歴

史があり、過去から伝えられたそのメッセージは、深い内容をそなえている。人類の癒しの機能において、女性ヒーラーは影の部分を担当してきた。それは次のような点に要約できる。1. 医療や科学における女性の業績は過小評価されたり無価値とみなされたり忘れ去られたりしてきた。2. 女性による改革、著作、家庭医学の伝統は、創始者の名前がわからないうのをいいことに、男性によって横取りされた。3. 男性が治療を誤ると女性がその責めを負わされ、すべてのことが女性のせいとされ、スケープゴートになった。4. 女性の医療や女性の多い専門分野は、法で制約されたり迫害の的にされ、男性の同業者に従属させられた。5. 女性の医療従事者は搾取された。

このような歴史的な経過を乗り越えて 21 世紀の医療をバランスのとれたものにしていかねばならない。

本書には今後の医療の発展と変革に必要なことが述べられている。

短いゼミであったことと、院生個々に学んできた背景が違う為この本から得られたことは異なると思われる。筆者にとっては、医療における歴史的な研究の視点が深められたゼミであった。